熱川温泉病院

症　例　概　要　患 者：50代　女性

病 名：脳出血

入院期間：2024年11月～（入院中）

【入院までの経過】

突然の意識消失、両側皮質下出血を発症し、急性水頭症に対して両側脳室ドレナージを施行。他院での回復期リハリハビリテーション後、リハビリの継続を目的として2024年11月に当院に入院となった。家族構成は夫と長女・次女・長男と犬の5人暮らし。長男は高校3年間は寮生活であり、大学生となり自宅戻り、5人での生活がスタートした所での発症であった。

内　　容

入院時FIM18/126点（運動13/91 認知5/35）で、日常生活全てで介助が必要であり、追視はあるが感情の表出はなく意思疎通は困難で、夫や両親との面会時も表情の変化はありませんでした。夫は「せめて何らかの方法で良いからコミュニケーションを取りたい」と希望されました。多職種によるカンファレンスでは、患者の持てる力である追視が可能であることを活かし、意識レベルの向上、基本動作能力向上を目標としチームで介入しました。

ご家族は東京在住であり、なかなか子供たちの面会はできませんでしたが、発症後、初めて息子さんと面会した時、患者さんの表情が変化し、涙を流されました。2月実施のご家族とのICで好きな音楽を教えて頂き、セラピストは訓練時に流して刺激導入を継続。特に野球少年であった息子さんとの思い出を彷彿させるMV「おかあさん～野球少年のうた～」を見せると感情を表出しました。

3月、看護師が更なる刺激導入としてご家族の一員であるペットとの面会を発案。カンファレンスで提案すると主治医の後押しもあり実行することになりました。病室でのペット面会はできないため、庭園で会えるようにするため、担当セラピストはリクライニング車椅子に30分以上乗車できるよう耐久性向上に努めました。また、車椅子乗車時間が長くなると嘔吐することもあったため、訓練時間の調整に気を使いました。その結果、リクライニング車椅子に約1時間乗車できるまで向上し、主治医の許可が下りました。

面会当日は天候に恵まれ、担当のNs・Cw・セラピストらが患者さんに付き添って行われました。庭園で愛犬とのひと時を過ごした患者さんの反応をご家族も大変喜ばれていました。家族で過ごす時間が止まっていた患者さんにとって、今回のペット面会はご家族にとっても患者さんにとっても特別な時間になりました。失われていた妻の表情を取り戻したいとの夫の思いを当院スタッフが受け止め、「Our Team」で叶えることができました。